特集 「三豊で農業を始めよう」

平成11年に制定された「食料・農業・農村基本法」には、新たに就農する人への支援がうたわれています。本市においても、平成26年に策定した三豊市農業振興計画に基づき、「担い手の育成・支援」施策に力を入れ、取り組んでいます。

本市における昨年度までの認定新規就農者は22人で、今年度は現時点で延べ27人と、職業として〝農業〟を選択する人は、少しずつ増えています。

今月の特集では、新たに農業の道に一歩を踏み出した人たちの話から、農業の魅力についてお伝えします。

食べごろ 旬ナビ Vol.3

みとよの旬をいただきます！

ワタリガニ（ガネ）

秋の贅沢といえば、大きなワタリガニ。今、三豊市近海ではワタリガニ漁が最盛期を迎えています。寒くなると、オス・メスともに身が詰まってより一層おいしくなり、11月下旬には卵を宿したメスが捕れ始めます。この内子と呼ばれるカニの卵がまた絶品。「食べると分かる、独特のおいしさがあるんよ」と、ワタリガニ漁名人の松下清貴さんもイチオシします。さて、肝心のおいしい食べ方はというと？「旨みを逃さないためには、蒸すのが一番！」仁尾町漁業協同組合の川上さんおすすめの食べ方で、ぜひご賞味あれ。

11月6日、20日（日）7時30分からの朝獲れ朝市にも登場予定！

せりに並ぶワタリガニは大きく活きがいい！

仁尾町で漁師を営む（左から）本多豊さん、松下清貴さん、塩田陽一郎さん

広報 みとよ 平成28年 11月号 目次 contents

3 特集 三豊で農業を始めよう
8 平成27年度決算報告
10 市職員の給与等の現状
12 M's Information みとよくらしのおしらせ①
成人式 ／ 日本一名誉賞 ／ 空き家実態調査 ／ がん検診 ／ 意見公募 ／ 確定申告講習会 ／ 県外から移住された皆さんへ
14 みとよHOT ほっとNEWS（ホットニュース）
16 M's Information みとよくらしのおしらせ②
市民対話集会 ／ 住宅用太陽光発電システム補助金 ／ 生涯学習課からのお知らせ ／ 後期高齢者医療被保険者の皆さんへ ／ 市長杯結果 ／ 税務署からのお知らせ ／ 金属ごみ・有害ごみ収集 ／ 粗大ごみ持込受付時間変更 ／ 市営墓地使用者募集 ／ 国民年金
20 秋のイベント
21 M's 深読みひろば
男女共同参画 ／ 少年育成センター
22 11月のお知らせ
募集 ／ 相談 ／ 講座・教室 ／ イベント ／ 納税のお知らせ ／ マリンウェーブ情報 ／ 国際交流協会
25 保健・相談
26 ここ笑み通信 ～子育てするなら三豊が一番！～
児童虐待防止推進月間 ／ いいお産の日イベント ／ ウィズの会 ／ 保育士募集 ／ M's Smile ふぉとぎゃらりぃ／乳幼児健診 など
28 みとよ写真帳 ／ 編集後記

三豊市の人口

※平成28年10月1日現在 （ ）内は前月比

世帯数 22,885世帯（+6） 総人口 64,946人（-30） 男 31,076人（-5） 女 33,870人（-25） ※香川県人口移動調査による

表紙 今月の市民力

▶アライオリーブの皆さん
▼三豊オリーブの皆さん

近年は、多くの果樹産地において農家の高齢化や後継者不足などで、やむを得ず管理を放棄する農地が増えています。そうしたなか、平成25年から遊休農地の有効利用と耕作放棄地対策として、オリーブの植栽を続けているのは、小豆島でオリーブ油作りも手掛ける農業生産法人株式会社アライオリーブです。

「オリーブの植栽を始めて3年が経ちました。多くの苦労がありましたが、耕作放棄された約11haにオリーブ4000本を植え、再び農地に戻すことができました。市民の皆さんには、県木のオリーブにもっと興味を持ってもらいたいですね」と話すのは、代表の荒井信雅さん。今後の抱負について伺うと、「小学校などの農園に植栽して収穫体験や、総合学習にも取り入れてもらえたらうれしいですね。そのときはぜひお手伝いさせてもらいますよ」と、笑顔で答えてくれました。

また、同様に、仁尾町でも三豊オリーブ株式会社も植栽に取り組んでおり、現在、約5haの農地を再生しています。「耕作放棄地が増えていますが、オリーブでその手助けができれば」と代表の柴坂詔弘さんは言います。

各社ともオリーブの実は収穫・搾油し、良質でこだわりぬいた三豊産オリーブオイルを売り出し中です。

山本町河内地区の80aの農地で、温州みかんやトマト栽培を手掛ける。自身はトマトの栽培、父は玉ねぎの採種と温州みかん栽培、母はトマトが原料のトマトソースなどの加工を行う分業制。

風の谷ファーム
藤田雄大さん（25歳）

HISTORY

16歳（H19）	両親とともに、北海道から祖父の住む山本町へ
21歳（H24）	介護職員として働きながら実家の農業を手伝い農業を学ぶ
24歳（H27）	トマト栽培を開始
25歳（H28）	市の認定新規就農者となり、本格的にトマト栽培に取り組む

〝アレルギー体質の子どもたちへ 体にやさしいトマトを届けたい〟

祖父の実家のある三豊で農業を

藤田さんは、9年前、両親とともに北海道から、祖父の住む三豊市へ引っ越して来ました。高校を卒業後、介護職員として市内で働きながら、実家の農業を手伝いました。そして今年2月、市の認定新規就農者になりました。

「実家が農業を営んでいたことも理由の一つですが、サラリーマンよりも自由度が高く、努力次第でどのようにもなる農業の可能性に魅力を感じました」

減農薬で体にやさしいトマトを

「私は以前からトマト作りに興味があり、手探り状態でしたが試しに栽培したところ、とても甘いトマトが収穫できたんです。ここは平地よりも標高が高いので、寒暖の差が大きいことが関係しているんだと思います。

また、私自身がアレルギー体質のため、特に農薬には敏感で、普段の食材にも気を配っています。もちろん、ここで栽培するトマトも、減農薬で栽培しています。肌に良い〝リコピン〟を多く含む品種を栽培していますので、女性にもおすすめです。私は、毎日食べているせいか、農業を始めてからの方が、体調は良いですね」

新規就農者の応援制度を活用

「農業を始めてすぐは、収入がありませんので、年間150万円の給付を受けられる国の制度『青年就農給付金』を現在も活用しています。このおかげで、農業を続けることができていると言えます。また、6次産業化のため作業場兼事務所の建屋を建築しましたが、その資金を調達する際に、利子のかからない日本政策金融公庫の『青年等就農資金』を使えたこともありがたかったですね」

農業には実践経験が大切

「農業を始める前は、栽培の参考書・専門書などを読んで知識を増やしました。また、私の場合は、幸いなことに、父から農業について1年間学ぶことができたことが良かったと思います。農業には知識も重要ですが、〝実践経験〟が最も大切だと考えています。マルチの張り方や、畝（うね）の立て方など、本で読んだだけでは上手くいきません。最低、1年間はインターン制度などを活用し、農家でしっかりと経験を積んでから、就農されることをお勧めします」

農業の魅力とは

「何より自由なところです。本人次第で作物の良し悪しが決まる。やりがいはありますね」

将来的により多くの品種を試し、効率の良い作り方、収穫方法を模索していきたいと藤田さん。

家族と協力しながら、着実に一歩を踏み出しています。

▲トマトはゆめタウン三豊やたからだの里、さぬきの三豊マルシェ（通信販売）で購入できます。新商品も近日登場！

豊中町桑山地区の約1haの農地で、家族でぶどうや温州みかんなどを栽培。

西谷果樹ふぁーむ
西谷八重さん（37歳）

HISTORY

25歳（H16）	結婚
26歳（H17）	事務職員として勤務
28歳（H19）	祖母の介護をしながら実家の農業を手伝う
32歳（H23）	夫とともに就農

〝代々続く想いを受け継ぎ 人に喜ばれる果物づくりを〟

今あるものを大事にしよう

「実家は2代続く果樹農家でしたが、両親から農業を継ぐよう言われたことはありませんでした。子どもも生まれ、そろそろ職場復帰かと思っていた矢先、あの東日本大震災が起きました。連日の報道を見て震災で多くの人の人生があっという間に無くなることに衝撃を受け、人の一生について深く考えさせられました。代々続く果樹園をどうしよう。今なら両親から農業を学べるのではないか。その時、『今、自分にあるものを大事にしよう』と決心し、その年の秋、夫と相談し、実家の農業を継ぎました」

農業は奥深い

「最初は、ぶどうなんて簡単にできるだろうと甘く見ていた部分がありました。しかし、思うような房づくりが出来ず、雨や風など自然にも大きく左右されました。その後、ぶどう一筋40年の両親に教わったり、試行錯誤を繰り返したりしながら、就農丸5年を迎えた今年、ようやく自分の思うような房づくりができるようになってきました」

農業をやってうれしかったこと

「私たちは、自分たちが作った果物をたくさんの人に知ってもらうため、市内の産直所などと交渉し、販路を少しずつ開拓していきました。すると、購入者とよく顔を合わせるようになり、『みかんおいしかったよ』『西谷さんとこのぶどうを食べたら他のは食べれんわ』など、消費者からの評価が直接返ってきました。

特に、納品していたとき、自分の商品のタグを持って買いに来てくれるお客さんがいたときは、何よりもうれしかったですね」

また、西谷さんは市内の女性農業者の集まり〝みとよ若嫁ファーム〟で、仲間とともに各種イベントにも出店しています。

「みとよ若嫁ファームでは、同世代の女性との共通の話題など、さまざまな情報交換ができるのがいいですね。これからの農業は、作物を作るだけでなく、こうした〝人との交流〟を大事にしていきたいと思います」

大先輩の作るぶどう

「先輩の果樹農家の皆さんが作るぶどうは形もそろって芸術的です。仕事も生活も丁寧でメリハリがあります。先輩方の後ろ姿を見ながら毎日をがんばっています」と西谷さんの目は輝いていました。

認定新規就農者になりませんか

認定新規就農者になると次の支援が受けられます。

①青年等就農資金（無利子融資）
②青年就農給付金（経営開始型）
③経営所得安定対策（平成27年産から）
④認定新規就農者への農地集積の促進

興味がある人はお気軽にお問い合わせください。

問 農業振興課 ☎73・3040

第8回 三豊市市制施行10周年記念事業 秋の大収穫祭!!

三豊発!! さぬき軽トラ市

11月27日(日)
9:00～14:00
三豊市役所前駐車場

これからは焼き芋のおいしい季節。糖度30度以上のあま～い焼き芋を味わってほしいです。

さんわ農夢株式会社

会場はこちら

メインステージイベント
10:00～13:30

出演予定
- 響屋×踊乱花
- EBJO(オーケストラ)
- 三豊市役所軽音部
- 石居直×松岡
- 軽トラッパー

他にも、たくさんの旬の野菜やフルーツが並びます。農機具との記念撮影(子ども限定)や、鳥取県八頭町、岡山県津山市の特産品販売などもあります。

私たちも出店します！

軽トラ市に初出店します。当日は、容器持参で計り売りもします。ぜひ、ご賞味あれ♥

▲ハチミツは2種類
深いコクのある甘さの百花蜜（左）
フルーティな味わいのハゼ蜂蜜（右）

田渕養蜂場
富山孝介さん

自前の船団大利丸(だいりまる)で捕ったイリコを自社で加工・選別しています！

大平水産
大平真史さん

当日は黒にんにくカレーを販売します。おいしいので食べてみてください♥

三豊エコファーム　白川大輔さん

みんなで盛り上げよう！

◀軽トラ市実行委員会の皆さん

生産者の皆さんへ！
軽トラ市を通して交流しませんか。興味がある方は下記まで。
軽トラ市実行委員会（農業振興課内）☎73-3040

市内にある2haの農地で、野菜やぶどうなど果樹の栽培に力を入れている。平成28年度軽トラ市実行委員長も務める。

HISTORY

23歳（H20）	大学卒業と同時に、愛知県のアパレル企業に就職
25歳（H22）	高松市のクリーニング店に転職
26歳（H23）	香川県げんきネットＳＥＥＤに加入
28歳（H25）	父親に弟子入りし農業を一から学ぶ
29歳（H26）	認定新規就農者となる

白井の実ファーム
白井悠貴さん(31歳)

〝夢は地域農業をプロデュースすること〟

香川県げんきネットSEEDとの出会い

「私が26歳のとき、東日本大震災で被災した東北の農家を助けるためのチャリティイベントを行う団体『香川県げんきネットＳＥＥＤ』に加入しました。そこで出会った県内で活躍している農家の人たちに影響を受け、『実家が農家なんだったら早く農業始めたほうが良い』と、背中を押されたのが農業を始めるきっかけでした」

新たな農業のカタチ

「三豊市は、県内でも有数のぶどうの産地で、生産量は県内で7割のシェアを誇ります。私は、この誇るべき産地を守り、百年後も産地であり続けたいと思っています。そのためには、各農家が力をつけ、同時に産地も強くなっていかなければなりません。産地が強くなるには、これまでの農業から一歩踏み出し、生産者と地域、そして企業と連携していくべきだと思います」

目標を持って制度の活用を

「国や市の制度は新規就農を後押ししてくれる良い制度だと思います。制度を利用する前に、意識したのは、この制度を利用して自分がどれだけ羽ばたけるかということです。例えば、青年就農給付金を受給する場合、5年後、10年後の自分の姿をイメージして、今の自分に足りないもの、必要な技術、知識をこの期間に習得しようと努力しました。ここが大切だと思います」

生産者と市民との交流の場 三豊発!!さぬき軽トラ市

現在、三豊発!!さぬき軽トラ市の実行委員長を務める白井さん。

「一次産業の農家は購入者と接点がなく、どのような人が買っているのか分かりません。そこで、軽トラ市に出店することで、生産者と購入者が直接やりとりすることができ、普段、自分が取り組んでいることや商品を多くの人に知ってもらう機会ができます。実際に、『このレタスをうちの近くのスーパーに置いてくれたら良いのに』という声から、軽トラ市出店後、販売店から声がかかったことや、地産地消を考えていたパン屋さんから、軽トラ市を通じて取り引きが始まったこともあります。

軽トラ市のお客さんの6割が市内の人です。出店者には、お客さんとのふれあいを通じて、自身の商品のファンを増やしたり、商品のリサーチをしたり、今後の仕事の幅を広げてもらえたらと思っています」

今回取材させていただいた皆さんは、将来をしっかりと見据え、確固たる信念を持って農業という職業を選択しています。そして、農業の楽しさ、喜びを日々実感しています。

本市はこれからも三豊の農業の未来を切り開く人を応援していきます。